県が奨励する農作物優良品種

えだまめの奨励品種について　「岩豆系１、２、３、４、Ｃ９」

農試技術部　県南、県北分場、園芸試験場

１．背景とねらい

本県では、えだまめ日本一をめざして生産倍増を運動を展開しており、昭和６３年以降１５００ｈａを目標に作付面積の拡大が計画されている。しかし、本県産えだまめは、他県産のものに比較して品質が劣ることから、良質、良食味品質の開発が強く要望されていた。

これに対し、岩手農試では昭和５８年から優良品種の開発を実施した結果、現在の奨励品種より収量並びに食味の優れた系統が開発されたので奨励品種に編入して、普及拡大をはかり、本県産えだまめの単収向上と品質改善により市場評価を高める。

２．新奨励品種の特性並びに栽培上の留意点

１）えだまめ「岩豆系１」（軽米町在来より純系選抜）

（１）特性の概要　「夕鶴」と同熟期で晩生種に属する。稔実莢数は多く「夕鶴」より５～８％多収である。莢は濃緑色で外観品質は良く、食味も優れる。主茎の長さは「夕鶴」並であるが、耐倒伏性は強に属する。

（２）栽培上の留意点　大粒種で出芽日数を多く要することから、播種適期を守り、播種に際しては覆土を浅めとする。強茎で倒伏に強いが、密播では有効莢数が減少し低収となるので５０００本／１０ａ程度の１本立とする。比較的莢の黄化が早いので、収穫期を失しないようにする。

２）えだまめ「岩豆系２」（玉山村在来より純系選抜）

（１）特性の概要　「ふくら」と同熟期の中生種に属する。茎長は「ふくら」より長いが耐倒伏性は強い。「ふくら」より１０％程度は多収である。莢の色は濃緑色で品質も良く、食味も糖含量が高く優れている。

（２）栽培上の留意点　「ふくら」より生育量は大きいが、耐倒伏性が強いことから栽植密度及び施肥量は「ふくら」並とする。「ふくら」と同様ビニールハウスによる早だし栽培にも適応できる。ウイルス病抵抗性は不明であるので防除基準に従って防除すること。

３）えだまめ「岩豆系３」（「ふくら」の放射線突然変異）

（１）特性の概要　熟期は「ふくら」と「夕鶴」の中間で中生の晩に属する。茎長は「ふくら」より３～５cm長いが耐倒伏性は強い、また節数、分枝数も多い。莢数、莢重とも「ふくら」より大きく多収で品質、食味も優れる。種子は褐色で「ふくら」より粒が大きく編球である。

（２）栽培上の留意点　「ふくら」と「夕鶴」の中間に収穫できる品種として栽培する、また、収穫は莢が充分に肥大、充実したあとに行う。栽培密度は「ふくら」並とし、施肥量は茎長が長いので倒伏させないため基肥の窒素成分で４～５kg／１０a程度とする。ウイルス病抵抗性は不良であるので防除基準に従って防除する。

４）えだまめ「岩豆系４」（岩手農試品種保存、岩浸豆Ａ３から純系選抜）

（１）特性の概要　熟期は「錦秋」より１週間程度遅い極晩生種である。茎長は「錦秋」より長いが耐倒伏性は強い、生育量は大きく、収量は「錦秋」より５～７％程度多収である。濃緑色の莢で外観品質が優れ、また糖含量も極めて高く、食味も優れる。莢の黄化は極めて遅い。

（２）栽培上の留意点　主茎長は長く生育量は大きいので密植は避け晩生種の基準によりやや広めの５０００本～５５００本／１０a程度とする。通常栽培では９月中旬以降の収穫となるので降霜前に収穫できる作型とすること。他品種よりやや小莢であることから、莢の充実、肥大に努める。

５）えだまめ「Ｃ９」（盛岡市在来より純系選抜）

（１）特性の概要　熟期は「夕鶴」並の晩生種に属する「茶豆」である。茎長は「夕鶴」より長く「盆茶豆」並であるが、耐倒伏性は強い。収量は高く、莢色は緑色で外観品種は優れる。糖含量は極めて高く、芳香を有し、そのため食味の評価は特に優れる。

（２）栽培上の留意点　茎長は長く生育の旺盛な品種なので、栽植密度は５０００本～５５００本／１０a 程度とし、施肥量は基肥の窒素成分で４～５kg／１０a程度とする。やや小莢であるため、莢を充分に肥大、充実させてから収穫すること。ウイルス病抵抗性は不明であるので、防除基準に従って防除すること。

３．適応地帯並びに普及見込面積

（１）「岩豆系１」岩手県内全域　普及見込面積　１８０ha

（２）「岩豆系２」　〃　〃　７００ha

（３）「岩豆系３」　〃　〃　３００ha～４００ha

（４）「岩豆系４」岩手県中南部及び県北平坦部　普及見込面積　１８０ha

（５）「　Ｃ９　」岩手県内地域　普及見込面積　９０ha